

事実の思想史

—— デイドロ執筆『百科全書』項目「事実」の分析 ——

淵 田 仁

城西大学 現代政策学部

要 旨

本稿は経験主義哲学が拡大していく 18 世紀フランスにおいて「事実」というありきたりな言葉にどのようなコンテクションが存在したのかを明らかにすることを目指した。とりわけ、ドゥニ・デイドロが執筆した『百科全書』項目「事実」に焦点を当て、そこで何が賭けられているかを明確にすることで、事実を巡る言説空間を広がりを知ることができた。デイドロの項目「事実」から、我々は 17 世紀から議論されてきた考証学的方法論がある意味無効化される危機的契機をデイドロ自身が察知していたことを知ることができた。その危機とは事実が公共的手続きから構成されるものであるという考えからすべてが個人の信念体系へと回収されてしまう、というポスト・トゥルース的なものと言えよう。

キーワード：事実、信念、考証学、ポスト・トゥルース、啓蒙主義、啓蒙思想、『百科全書』

1. 問いの設定

一般的に、18 世紀フランス哲学は感覚や実験、経験による知に基づいて世界を理解しようとする〈経験主義〉に立脚し、生得観念といった普遍原理から出発する 17 世紀の〈合理主義哲学〉に対して反旗を翻した哲学であると理解されている。この歴史的变化は、〈原理から事実へ〉という知的転回、もしくは幾何学的真理から自然学的真理への方向転換、あるいは演繹的方法から帰納的方法へという方法の変化等々、様々な命題として言い表される。このような地殻変動が哲学史のなかで生じたということは周知の事実であるといつてよい。

しかしながら以上の思想史的理解に対して、近年多くの異議が唱えられ始めている。例えば、田口卓臣はデイドロ『自然の解明に関する断章』の精読からこの図式の訂正を試みている⁽¹⁾。すなわち、デイドロの眼差しは演繹か帰納か、体系か観察かといった二項対立図式そのもののへの懐疑や、客観的な学とされるものを成立させる社会的・政治的諸条件に向いている、と田口は解釈する。また、18 世紀啓蒙期の経験主義哲学そのものの見直しも例えばセバスチャン・シャルルやアンドレ・シャラクらの研究⁽²⁾によって進行しており、そこでは既存の思想史理解の単純さが

批判的となっている。

本稿もこのような〈啓蒙〉研究の潮流のなかに位置することになるだろう。つまり、〈原理から事実へ〉というスローガンを再検討する狙いを念頭においている。とはいえ、これまでの学説史、思想史的理解を切り崩すこと、その大きな思想潮流を再検討することは容易ではない。ゆえに、本稿で我々は旧来の思想史的図式を新たに〈問題化〉するためのひとつの戦略を提示することに努める。

その戦略の一つとして、本稿で我々はフランス語の〈事実 fait〉という語に着目する。日常的な意味で言えば、〈事実〉とは生じたこと、成したこと、事件、行為、問題という無数の意味を持つ、いわば〈ありふれた言葉〉である。とはいえ、経験主義にとって事実とは知の基礎を構成するものである。では、何をもって我々はある事柄を事実とみなすのか。この問題について議論しなければ、経験主義の正当化は果たし得ないはずだ。

数年前から、「ポスト・トゥルース Post-truth」という言葉が世界中で話題となっている。この言葉が象徴するように、〈事実とは作られたものだ〉〈事実の正しさよりも感情に訴えることが重要だ〉といった考えが日常生活から政治空間に至るまで行き渡っている。このような知的態度が話題になるためには、〈事実〉に対して私たちが持つ信頼がまずもって存在しなければならない。すなわち、〈確かな知とは事実に基づいていなければならない〉という漠とした信念が私たちの世界で共有されているがゆえに、「ポスト・トゥルース」現象が生じているのである。だが、こうした事態は歴史的に繰り返されてきたのではないか。とりわけ、今問題にしようとしている啓蒙の世紀は、このポスト・トゥルースの問題にまさに正面からぶつかった時代と言えるのではないか。ゆえに、〈ある事柄がいかに事実となるのか〉という問題を思想史的に論じることは現代の我々にとっても重要であろう。

こうした問題意識において、啓蒙の世紀に経験主義・科学主義が定着していく過程で「事実」を巡るどのような議論があったのかを明らかにすることが本稿の目的である。本稿では改めて問いを立ち上げ直すために、いくつかの先行研究や一次テキストを読み進めながら、問いを洗練させることが主眼となっている。

実際には、漠然とした語を対象に研究するのであれば、誰がしかの哲学者の学説・体系を整理するだけではおそらく十分ではないだろう。Web上に存在する古い文献データをスクレイピングし、対象語句の運用実態を網羅的に見ることではじめてリアリティある語のコノテーションが見えてくるはずだし、デジタルヒューマニティーズといった新しい分野はこの困難な作業を可能にする潜在力を持つてはいる。しかし、本稿でそれを実行することは到底できない。かつ同時に、テキストそのもののコンテクストを無視して多義性を孕む語——同時に凡庸でもある語——に着目し、語の運用のレベルで議論することは一種のカテゴリーミステイクを冒す危険を孕むだろう。とはいえ、〈事実〉について考えることは18世紀の思考形式を明確にする上で重要な作業である。なぜならば、啓蒙の時代は様々な学問が未分化の状態からまさに分化、ディシプリン化していこうとする学問的胎動の時代であり、各領域でのボキャブラリーの用法が定まっておら

ず、言葉や概念が特定の領域に留まらず、インターディシプナリーに流通する時代であったからだ。

以上の問題設定を踏まえ、本稿は以下のような構成をとる。まず、「事実」という語が思想上にてどのような負荷にさらされてきたのかをアラスデア・マッキンタイアや科学史家の議論を踏まえ検討する。次いで、デイドロ執筆による『百科全書』項目「事実」の読解をおこなう。なぜ『百科全書』編集者デイドロは凡庸な語を取えて一つの大項目と位置づけ、「事実 fait」という語を含む他項目に先んじて一般名詞「事実」について書いたのか。この分析を通じて、デイドロが「事実」という語に付与したコノテーションの変化の見出すことができるだろう。以上の作業を経て、「事実」を巡る思想史の賭金を浮き彫りにすることを目指す。

2. 「事実」の思想史

『美德なき時代』（1981年）のなかでアラスデア・マッキンタイアは以下のような時代診断を下している。我々が生きる近代社会は、道徳的判断が個人的感情あるいはその表明にすぎない情緒主義に陥っており、道徳的相対主義の時代に突入してしまっている。そして、そうした情緒主義の原因を彼は道徳を合理的に基礎づけようとした啓蒙主義のプロジェクトの破綻——事実を扱う科学は結局のところ、情緒主義の隘路に陥らざるをえない——に見ていた。マッキンタイアが下した時代診断の正否をここでは問わないが、彼の情緒主義批判において18世紀啓蒙主義批判そのものは彼の論述の主要な対象となってることは確かである。

こうした文脈においてマッキンタイアは「「事実」、説明、職人芸」と題された章（第7章）を記しているのだが、そこで彼は事実という概念が18世紀に発明されたものであると主張した。経験 experience を事実 fact と同一視して、以下のように述べている。

経験論者のいう経験という概念は、17世紀後期から18世紀にかけての文化的発明であった。この概念の起りが自然科学が起こったのと同じ文化においてであったということは一見したところ逆説的である。⁽³⁾

なにか「逆説的」であったのかといえ、経験とはそもそも「17世紀の認識論上の危機のための万能薬」⁽⁴⁾として発明されたものだからである、とマッキンタイアは言う。

つまり、と見える (seems) とである (is)、すなわち見かけ (appearance) と現実 (reality) との間のギャップを埋めるための方策として意図されたのである。その概念は、あらゆる経験主体を閉じ込められた領域とすることによって、このギャップを埋めようとした。⁽⁵⁾

マッキンタイアは、ここで17世紀の認識論として何を想定したかについて詳しく語らない。

17世紀における観念（見かけ）と実在（現実）の不一致を主張する懐疑論者、観念論者の隆盛に対する素朴実在論者のやり口として事実という概念が必要不可欠であったということを意味し、このような事態をマッキンタイアはここで念頭に置いていたのであろうか。だとするならば、見かけと実在のズレを最初から念頭に入れているような自然科学がわざわざ実在論の武器を自ら用いようとするということは逆説的な事態であるといえよう。

こうした時代認識のもとで、マッキンタイアは17世紀後半からの新しい経験、事実概念の発明に言及する。

観察と実験という自然科学の概念は、と見えるとであるとの間の距離を増大するように意図されたものであった。（……）自然科学は、ある種の経験、それも科学的注目のためにふさわしい形態に鑄造された経験だけに着目することを私たちに教えるのである。⁽⁶⁾

見かけと現実の一致ではなく、そのズレの増大が近代の科学化において重要であった。それは機械や実験によって「鑄造された経験」ではあるが、この経験の創出によって、「「事実」は価値とは無縁なものとなり、「である」は「べき」と異質なものの」⁽⁷⁾となることが可能となった。こうした事実の事実性における新しい認識論が自然的世界だけではなく道徳的世界をも覆っていく時代が、マッキンタイアにとっての〈美徳なき時代〉であったのだろう。

マッキンタイアが主張する〈自然科学的な意味における事実は17－18世紀にかけて創案された〉という発想は目新しいものではない。とりわけ科学史の領域では、非常にホットな論点であった、といってよい。この問題を議論したものとしては、スティーブン・シェイピン&サイモン・シャッフアーによる『リヴァイアサンと空気ポンプ：ホップズ、ボイル、実験的生活』（1985年）⁽⁸⁾を挙げることができる。

17世紀イングランドで、アリストテレス以来作り出すことができないとされてきた真空を生み出すことができる空気ポンプなる新しい科学技術を巡って様々な論争が巻き起こった。それは「17世紀のサイクトロン」とも言える技術であるという。シェイピン&シャッフアーはこの空気ポンプを巡るロバート・ボイルとトマス・ホップズの論争を分析することで、実験的事実がどのようにして事実として認められるのかを哲学的・認識論的観点に留まらず、社会的観点からも明らかにした。

彼らはまずもって「事実を確立するのは個々人がもつ信念の集積」⁽⁹⁾であると考えた。つまり、事実とは「ある人が実際に経験し、自分自身にたいしてその経験の信頼性を請けあい、他の人びとに、彼らがその経験を信じることに十分な根拠があると保証するというプロセスの結果としてえられるもの」⁽¹⁰⁾なのである。そうした信念を獲得する方法としてボイルがとった戦略を三つのテクノロジーと類型化してまとめている。

第一が「物理的テクノロジー」である。ボイルは空気ポンプという知的生産機械について詳細な図版を付して説明している。各パーツの機能を細かく説明することで、機械が空気を漏らさな

い空間を生み出しているという信念を他者に伝えることが可能となる。また、実験風景の図版による報告やその時の付帯状況あるいは失敗の記述といったものは読者を仮想目撃者と仕立て上げるための「文章上のテクノロジー」と言える。これが第二のテクノロジーである。そして第三の「社会的なテクノロジー」として、シェイピン&シャッフアーは実験コミュニティの創出を挙げている。そのコミュニティは対人攻撃や論破が目的なのではなく実験結果に同意を作り出すことを目的としたものであった。

以上のような三つのテクノロジーが相互機能することによって、ボイルの実験は事実としての地位を科学者コミュニティのなかで得ることが可能となった。言うなれば、これらテクノロジーはあるコミュニティのなかで「客観化をおこなう手段」⁽¹¹⁾であった。

彼らのこうした議論は、自然科学がいかように事実に関する学として成立したのかを社会的観点から精緻に描き出すことに成功しているように見える。とはいえ、彼らの議論の基礎になっている「事実を確立するのは個々人がもつ信念の集積」という考えがそもそもどのように成立してきたのかについてまでは問うてはいない。つまり、事実が構築されるものという見方や構築された事実につきまとう証言、確実性、蓋然性といった認識論の問題が問われるべきであろう。

確実性 certainty と蓋然性 probability の問題については、数多くの研究が存在する。代表的なのが、イアン・ハッキングの『確率の出現』（1975年）であろう⁽¹²⁾。彼はおもにフランスにおけるプロバビリテがいかにして1660年頃のブレーズ・パスカルによって数学的確率の問いとして出現し、現代的な意味での確率となったのかを描くことを目的としている。そこでの中心的問題は数学であった。そして、ハッキングの研究に続く形で登場したのがバーバラ・J・シャピロの『17世紀イングランドにおける蓋然性と確実性』（1983年）である⁽¹³⁾。大陸側の数学に焦点に当てるハッキングの議論とは対照的に、シャピロの視点はイングランドにおける数学に限らない諸学問における蓋然性と確実性の議論であった。次いで、本書において主要な論点ではなかった証拠、証言といった法的言語に関する問いは、彼女の次著『「合理的疑いを超える」と蓋然性事由』（1991年）において展開された⁽¹⁴⁾。

そして、シャピロの関心は「事実 fact」に向いていった。その書が『事実という文化：イングランド、1550年-1720年』（2000年）である⁽¹⁵⁾。シャピロの関心は蓋然性と確実性といった思考が西洋世界のなかでどう根付いてきたかを検討することであった。シェイピン&シャッフアーと同様、フランシス・ベーコンやロバート・ボイルといった思想家たちを取りあげているが、彼女の目論みは彼らの言語的实践においてこの語がいかに作用しているのかであった。シャピロはその実践の場として、法、歴史、旅行記、雑誌新聞メディア、自然史（自然科学）、宗教の六つのジャンルを設定し、各現場でどう事実概念が用いられているかを検討した。例えば、イングランドにおけるコモン・ローの伝統では判決や量刑判定といった法的問題は判事が担当し、陪審員が関わるのは法的問題ではなく証言や証拠による事実の認定のみであった。シャピロはこの伝統のなかで事実認定の仕方がどのように変化してきたかを記述している。そして、事実という概念はまづもって法的領域において重視され、その概念は18世紀に自然科学の領域まで適応されていっ

たというのが本書の大まかな主張であった。しかしながら、シャピロが描く「事実」の物語はやや単線的すぎるきらいもある。『事実という文化』は法的領域で厳密化された事実認定の手続きが、歴史や科学といった他の領域に転用されていったという物語を描いているわけだが、そこにどのような誤用や濫用ないし躊躇、論争があったのかをも明らかにすべきではないだろうか。現代的な我々の見方をアナクロニックに歴史のなかに持ち込んでしまっているのではないか。

そうした時代の躊躇いを示す事例として、重農主義者として有名であったテュルゴー（1727-1781 年）による学問論の一節を引用したい。

自然の科学〔sciences physiques〕という名において、私は以下のものを理解する。論理学〔logique〕、これは我々の精神の操作と我々の観念の生成に関する学知である。そして形而上学〔métaphysique〕、これは自然と存在の起源を取り扱う。最後に、いわゆる物理学〔physique〕、物体同士の相互作用や可感的現象の原因と〔因果の〕連続を観察する。自然の科学に歴史〔histoire〕を加えることもできるかもしれない。〔とはいえ、〕歴史の確実性は決して高いものではないだろう。というも、事実の連続は結合しうるものではないだろうし、大昔にすでに過ぎ去った事実を新たに検討することは難しいからである。自然というものは常にそれ自身と類似しており、実験は我々の眼前に同じ現象を呼び出すことができる、もしくは新たに現象を生み出すことができる。しかし、ある事実についての最初の証人が信頼するに値しないとすれば、事実は永久にその不確実性の中にとどまることになり、正確な結果を我々は決して知り得ないことになる。⁽¹⁶⁾

1751 年頃に執筆された『人間精神の進歩に関する第二論文草案』において、テュルゴーは「自然の科学」の下位区分を考える際に、歴史学を入れるかどうかについて検討している。しかし、このテキストにおいてテュルゴーは自然の科学への歴史の導入にためらいを見せている。その理由は歴史的事実の理論的問題に由来する。彼は歴史的事実と実験的事実を対比している。繰り返し検証可能性を確保できる「実験 expérience」という事実と比べ、過去の事実は再現不可能であり、過去の諸事実間の「連続」——すなわち因果関係——を再構築することも難しい。ゆえに、自然の科学に歴史を入れるべきかどうかテュルゴーは思案している。彼にとって問題は事実の「確実性 certitude」であり、確実性を有する客観的存在者に「事実」を格上げすることができれば、歴史も自然の科学になりえるのである。

ある領域の言葉が別の領域において使用されるとき、その語はそのままの意味で使うことは可能なのだろうか。おそらくシャピロが描いたようなスムーズな歴史は存在しないのではないだろうか。ゆえに、思想史における転用、誤用、躊躇いを描き出すことがまずは重要であり、そこから思想史図式の再検討が可能となると私は考える。その一例として、本稿ではディドロの記述に着目する。

3. 『百科全書』項目「事実」の賭金

我々が分析を試みるディドロのテキストは、『百科全書』第6巻（1756年）の項目「事実 FAIT」である。「fait」という語を含む小見出しに関してはプーシェ・ダルジがその多くを執筆している⁽¹⁷⁾。ディドロは分類符号無しの項目「事実」をプーシェ・ダルジらの諸項目の先頭に位置づける。つまり、様々な意味合いを有する「fait」に対して、ディドロが自らその総論を書こうとしている、というような意気込みを感じざるをえない⁽¹⁸⁾。例えば、「事実」は『百科全書』に先行する辞書にも同名項目は存在するが、その多くは字義的な内容に過ぎない⁽¹⁹⁾。

では、実際にディドロの項目「事実」を見ていこう。ディドロは当項目をその定義の困難さの告白から始めている。

事実、男性名詞、定義することが難しい用語の一つである。一般にある事態が可能性の状態から実在の状態へと移行したというあらゆる既知の状況において事実が用いられている、と
言うことではより明確になったとはいえない。⁽²⁰⁾

ディドロは可能態、現実態というアリストテレス的概念を用いて事実を定義しようとすることに不満を抱いている。レカ＝ツィオミスがディドロの項目執筆法として指摘しているように、この項目「事実」は語の定義を目指す類いのものではなく、他の言葉との関係性、もしくは記述から成る項目である⁽²¹⁾。実際にディドロは、当項目において文法的、語用論的定義を一切おこなわず、事実を巡る諸条件の記述に徹している。

さて、アリストテレス流の哲学的定義を越えて、当項目第二段落からディドロはまず事実を三分類する。ひとつが神の行為としての事実であり、次に自然現象としての事実、最後が人間の活動としての事実である。それぞれの事実は神学、哲学、歴史というように各学問へと関連づけられる。そして、ディドロは神的事実、自然的事実、歴史的事実に対してそれぞれ参照指示を与えている。

神の行為に関しては項目「確實性 Certitude」および「奇蹟 Miracle」を見よ。自然の現象に関しては項目「現象 Phénomène」「観察 Observation」「実験的 Expérimental」そして「物理学 Physique」を見よ。人間の行為に関しては項目「歴史 Histoire」「批判 Critique」「考証学 Erudition」等々を見よ。⁽²²⁾

この第二段落において注目すべきは「すべて〔の事実〕は等しく批判〔critique〕の対象となる」⁽²³⁾とディドロが記している点である。ここにディドロ——の基本姿勢——むしろ啓蒙の世相全体が共有している姿勢ではあるが——を見ることができる。あらゆる事実は批判という知的ブ

ロセスにかけられる。啓蒙の時代がこの「批判」という語を受け継いだのはピエール・ベール(1647-1706)からである⁽²⁴⁾。このベールの遺産は上述の各参照指示からも分かるようにディドロの項目「事実」に強い影響を与えていた。神的事実にせよ人間の歴史的事実にせよ、あらゆる事実は等しく批判という知的検査の対象となる。ゆえに、第三段落以後の項目「事実」の内容は、事実の検討方法に関するものとなるのである。結論を先取りして言えば、ディドロにとっての問題とは〈事実とは何か〉ではなく、〈いかなる条件において我々にとって「事実」が成立するのか〉という事実の構成要件を巡る議論であった。

ディドロは先ほどの事実の三分類を提示した直後の第三段落において別の区別を提案している。それは、「自然的 naturel」な事実か「超自然的 surnaturel」な事実という区別である。一見するとこの二つの区別は人間を含めた自然的世界と神的もしくは神学的世界という二分法のように見えるが、ディドロはこの区別の意味内容を以下のように記している。

さらにより一般的な二つの視点から我々は事実を考察できるかもしれない。事実は自然的であり、あるいは事実は超自然的である。〔前者においては〕我々は事実の目撃者であった、あるいは〔後者において〕事実は伝承、歴史そしてあらゆる遺物〔monuments〕を通じて伝達される。⁽²⁵⁾

ディドロが〈事実〉について検討するのは、項目「事実」が最初ではない。『百科全書』第一巻項目「アグヌス・スキティクス AGNUS SCYTHICUS (スキティア仔羊草)」においてディドロは実際には存在しないであろう仔羊に似た幻の植物について語る際に、信じるに値する事実を判断するために事実の分類をおこなっている。

この項目でディドロは、まず事実を「単純なありふれた事実」と「例外的で驚異的な事実」に二分し、前者を「一時的な事実」と「恒久的な事実」とに分ける。そしてまた「一時的な事実」は「啓蒙された時代に生じた事実」と「暗闇と無知の時代に生じた事実」に、「恒久的な事実」は「手の届く場所での恒久的な事実」と「手の届かない恒久的な事実」に区分される⁽²⁶⁾。この分類におけるディドロの主眼は事実の真実性を吟味する上でこの分類が有効であるということを示すことにある。アグヌス・スキティクスの事例に関して言えば、この分類にかければおよそ事実とは言えないとディドロは考えるのである。

さて項目「事実」に戻れば、ここでの分類が項目「アグヌス・スキティクス」とは異なっているということはすぐに分かるであろう。項目「事実」でディドロが問題としていることは、項目「アグヌス・スキティクス」が問題とした事実の本質論——真実かどうか——ではなく、我々の事実の知り方、伝わり方である。つまり、目撃者として我々が直接知る事実か、伝え聞かされ知ることになる間接的事実かという形式的観点からディドロは事実を記述しようとしているのである。

事実の分類を終え、ディドロは直接的／間接的事実それぞれに内在する理論的問題の検討へと

移行する（第四段落）。まずは「自然的」と形容される直接的事実、すなわち我々自身の経験に基づく事実の問題をデイドロは分析する。この事実のカテゴリーにおいて問題となっていることは、直接的事実の確実性は何に由来するのかということである。そこでデイドロはひとつの状況を想定する。ある事実が我々の目の前で生じ、かつ我々が誤謬を犯さず他人にも欺かれないほどの注意力をもって事実を目撃した場合を想定する。その場合、「我々は事実の本性が含みうる完全な確実性〔certitude〕をもつ」⁽²⁷⁾とデイドロは言う。「含みうる」という言い回しが表示しているように、確実性は事実そのものに内在するものであるかのようにデイドロは記述している。しかし、デイドロはこのように説明した直後に議論を反転させる。つまり、事実の確実性というのは、事実に付帯する性質ではなく、事実を見る者に依存するという立場にデイドロは与しようとしているように見える。

しかし、この「事実に対する」確信〔persuasion〕には振り幅がある。というのも、確信の度合いやその強さは事実が起きた状況や目撃者の個人的資質の多様性に対応するからである。ゆえに、それ自体で高い確実性は人がより信じやすくあれば一層事実は単純かつありふれたものとなるし、人がより慎重であれば事実は例外的で複雑なものになる。⁽²⁸⁾

「与しようとしているように見える」という譲歩的表現を用いた理由は、上の引用でデイドロが確実性の所在を事実の側にも認めているからである（「それ自体で高い確実性」）。とはいえ、ここで確実性の問題が「確信」という心的状態に依存するということをデイドロは主張している。

先に述べたように明証性を学問の基準としたデカルト以来、確実性の問題は蓋然性 *probabilité* とともにつねに論争のなかにあった。『百科全書』においても確実性に関する多く存在する。例えば、『百科全書』第一巻序文のなかでダランベールは明証性 *évidence* と確実性を次のように区別し定義している。

明証性は、厳密には、精神がそのつながりを一挙に知覚する諸観念に属する。確実性は、そのつながりがいくらかの数の中間の観念の助けによってしか認識されえない観念、あるいは、同じことだが、それ自身で明証的なひとつの原理との同一性が多少とも長い回り道を経てはじめて発見されうる命題、に属する。ここから帰結されることは、その精神の素質に応じて、あるひとには明証的であるものが他のひとにはただ確実でしかありえない場合がある、ということである。⁽²⁹⁾

上の記述は観念の生成に関わる明証性と確実性の区別であるが、その違いは「一挙」に観念が把握されるか「長い回り道」を通じて把握されるかである。ただし、ダランベールはこの生成の経路の長さは諸個人の「精神の素質」に依存すると指摘している。つまり、ダランベールは一個人がいかに観念を発見するかという生成の問題においてのみこの二つの特性を定義しているので

ある。この意味において、ダランベールとディドロの確実性に関する見解はある部分で一致している。というのも項目「事実」において、ディドロは自らが目撃者となる自然的事実においてもその事実の確実性は「個人的資質」に依存すると主張するからである。

ところで、確実性に関する議論で重要なのはもちろん『百科全書』第二巻項目「確実性」であり、それは先に見たようにディドロが項目「事実」の参照先として挙げているうちのひとつである。項目「確実性」はプラド師 (l'abbé Jean Martin De Prades, 1720-1782) によるものであるが、ディドロはその項目の最初と最後に自らの筆を付け加えている。プラド師の冗長な護教論の記事内容に対してディドロが介入したわけであるが⁽³⁰⁾、そこでのプラド師の論点はベールを震源とする歴史ビュロン主義の延長線に位置する。すなわち事実における「道徳的確実性 certitude morale」の確立手段の策定およびそれによる啓示無き奇蹟——「奇蹟」もまた項目「事実」の参照先のひとつである——の擁護であった。プラド師によれば、事実に対して道徳的確実性を得るには「目撃者もしくは同時代人の証言、口頭伝承、歴史そして遺物」⁽³¹⁾が必要であり、「目撃者や同時代人は歴史のなかで語り、口頭伝承は我々を彼らまで遡らせるに違いなく、こう言ってよければ遺物は彼らの証言を繋ぎ合わせるのだ」⁽³²⁾。かくしてプラド師の項目「確実性」はキリスト教者の立場から教会的事実の擁護に徹したが、それに対してディドロは1699年のロンドン王立協会『哲学会報』に掲載されたジョン・クレイグ (John Craig, 1663-1731) の確率論を援用しつつ歴史的証言から引き出せる確実性の計算方法を紹介している。

先ほど我々が確認した項目「事実」における自然的／超自然的という事実の二分法をディドロが提示する際に、彼の念頭にはプラド師があったことは確かであろう。ディドロは目撃者の事実を自然的事実と規定し、伝承、歴史そして遺物を超自然的事実に分けて当項目において議論を展開しているのである。そして、プラド師が道徳的確実性のもっとも高い目撃者、同時代人という直接的体験者の有無を最重視していたにもかかわらず、ディドロは項目「事実」においてこの議論を「確信」という語を用いながらすべてを「個人的資質」へと還元していく。こうして事実の確実性を巡ってプラド師とディドロの間にはつねに論争的関係があったのであり、それは『百科全書』の刊行を通じてなされていた⁽³³⁾。

さて我々のテキスト分析に戻ろう。次に超自然的事実、すなわち伝承や歴史といった伝達によって知られる間接的な事実に関するディドロの議論（項目第六段落以降）を見ていく。ディドロは歴史や伝承によって伝えられる事実を判断するには「ひとつの規則 une règle」しかないと主張する。

もし事実が歴史や伝承によって我々に伝わるとすれば、我々はその事実を判断するためひとつの規則しか持ち得ない。その規則の適応は難しいだろうが規則は確実なものである。それは過去の世紀の経験や我々の経験である。⁽³⁴⁾

ディドロが事実判断のために持ち出す規則とは「経験 expérience」であった。デュマルセ執

筆の項目「経験」の定義のような「見たものについてや良くも悪くも我々に起きたことについての反省に加えられる長きに渡る人生のなかで獲得した知識」⁽³⁵⁾という経験から事実を判断すべしというあまりにも単純な結論をディドロはここで唱えているのだろうか。

しかし、上の引用の直後にディドロは経験にも疑問を呈する。「その観察眼〔coup-d'œil〕で満足してしまうと、しばしば誤謬に身を呈することになるであろう」⁽³⁶⁾。そして議論は一旦振り出しに戻るわけであるが、ここからディドロは別の議論を展開する。それが過去の人間の証言の問題である。証言の正当性に関する議論は、先ほども述べたようにピエール・ベールの『彗星論雑考』やアントワヌ・アルトール&ピエール・ニコルの『論理学』において議論されてきた奇蹟を巡る考証学的問題であった⁽³⁷⁾。そこでは最初の証言の性質や証言の数、証言者の性格といった問題が議論されていた。項目「アグヌス・スキティクス」の後半でディドロもこの種の議論を提示しているが、そこでは「夢物語に陥りたくなかったら、真理を心から愛していたら、人の話を信用するかしらないかはこうした原則にもとづいてきめなければなるまい」⁽³⁸⁾と述べるに留まり、ベールやポール・ロワイヤルらの議論の簡単な紹介に留まっていた。同様に項目「事実」においてディドロはこの証言を巡る問題を展開している。まずもってディドロは証言者の可謬性に気を配るよう提案する。

いかに我々が「証言者である」老人たちの話に対して敬意をもつにせよ、この老人たちが人間であり、かれらの知識や真実性を決して我々は知り得ず、他の人間が我々に彼らについて言うこと、言ったこと、そして我々が自ら彼らについて感じることを忘れないように用心せねばならないだろう。⁽³⁹⁾

この「用心」について具体的にディドロは証言に関する賛否両方の収集、目撃当初の状況の考慮、証言者が語る真理と嘘の数を計算することを挙げている。これらのことによって確実性の度合いが決定するとディドロは主張する。ここまではディドロ以前の証言を巡る議論ととりわけ差異はなく、非常に穏当な事実の客観化を巡る議論と言えよう。しかし次の瞬間、ディドロはこの確実性を決定する「原則」に対して懐疑を差し挟む。

この原則は確かである。この世界のなかに我々は到来し、そこで目撃者、書かれたもの、遺物を見つける。しかし、我々自身の経験を除いて何が我々にその証言の価値〔valeur〕を教えてくれるのだろうか。⁽⁴⁰⁾

ディドロの議論の争点は事実における「確実性」からその「価値」へ移動する。事実の価値を巡るディドロの論点は二つある。ひとつは個人の多様性であり、もうひとつはその個人にとっての事実の「真実らしさ vraisemblance」である。

ディドロにとってまずもって人間とは無限に異なる存在者である。「地上には〔身体の〕組織

によっても知識によっても経験によっても似ている二人の人間はいない」⁽⁴¹⁾。そしてこの前提を個人と事実を伝える証言の關係に敷衍すれば、「〔証言や遺物等の〕これらシンボルについて同じ印象を正確に形成する人間も二人としないのである」⁽⁴²⁾。ベールらが整備した事実を巡る客観化の原則が、ディドロにおいては無に帰する。無限に異なる個人が存在する以上、あらゆる表象を個人は無限に異なるように受け取る。ゆえに、「それら自身の存在と同様の強度で一方が信じていることを他方は否定するのである」⁽⁴³⁾。これが個人の多様性というディドロの前提から導かれる「事実」のあり方である。

ゆえに、事実をつねに個人にとって真実らしいものかどうかということが問題となる。その真実らしさを決定するのが我々の経験である。騙された経験が多ければ、事実の真実らしさは減するし、逆もまた然りである。「何らかの事実について我々は、我々の理性や我々の状態〔condition〕が我々に知ることを可能にしうるあらゆることを知るのである」⁽⁴⁴⁾。つねにいかにか客観的手続きによってその確実性が増すように見えても、事実は個人にとって真実らしさしか有さない。しかし、それはあらゆる事実が蓋然的なものに留まるということを意味しない。むしろ、事実の価値が「我々の生を犠牲にする」に値するものと個人が判断すれば、その事実が客観的に真であろうが偽であろうが、個人にとってその事実は「崇高な真理」となる。このようにディドロは結論し、項目「事実」の結尾に参照指示として項目「信仰 Foi」を挙げる。この最後の参照指示はディドロお得意の皮肉であろうか。おそらくそうであろうが、より重要なのは〈事実〉がディドロにとって非客観的なものであり、考証学的手続きそれ自体においても事実は信仰、信念の問題圏から抜け出すことはできないということであろう。このように考えれば項目「アグヌス・スキティクス」から項目「事実」において、ディドロの「事実」に対する眼差しは考証学的問題から内面性の問題へとその重心変化が伺える⁽⁴⁵⁾。

4. おわりに

本稿では「事実」という語を巡る諸研究の紹介とディドロの『百科全書』項目「事実」とを検討した。ディドロにとって「事実」は我々の目の前に転がっている単なる思考の素材、素朴な存在者ではなかった。事実が事実として我々のあいだを流通するには、様々な要件が存在するとディドロは考えていた。個人間の差異を強調するディドロは、我々の目にはオルタナティブ・ファクトを信奉する現代の悪しき相対主義者のように映るのではないか。例えば、反啓蒙主義を展開した同時代人ベルジェ師（Abbé Nicolas-Sylvestre Bergier, 1718-1790）による奇蹟擁護論などは、本論で明らかとなったディドロの「事実」観を逆手にとってなされたものと言える⁽⁴⁶⁾。こうした危うい立場に自ら身を置くディドロの意図とは何であったのか。この点を明らかにすることが今後の課題となる。

最後に付け加えるならば、本稿では検討できなかったが啓蒙の世紀における〈事実〉の問題圏においてジャン＝ジャック・ルソーが重要であることも忘れてはならない。『人間不平等起源論』

において「あらゆる事実を退けよう」と宣言しつつも、当時の自然誌や旅行記の情報、そして自らの内的観察を頼りに仮説の人類史を構築したルソーもまた別様な〈事実〉の在り方を想定していたのではないか。そして、彼自身の人生は〈スキャンダルな事実〉に翻弄された人生でもあった。『告白』や『対話』といった自伝的テキストはまさに公衆がルソーに抱く〈誤った事実〉の書き換えと〈正しき事実〉の提示が問題となっていた。この意味において、誰が事実を所有するのか、誰が事実を語る権利を有するのかという問題と最期まで付き合わざるをえなかった哲学者としてルソーを読むこともまた可能であろう。この意味において、啓蒙の時代の実事とは単純な存在者ではないのである。

注 記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（19K12965、研究代表：淵田仁）の助成を受けた研究成果の一部である。

《注》

- (1) 田口卓臣『怪物的思考——近代思想の転覆者デイドロ』、講談社メチエ、2016年。
- (2) Sébastien Charles, *Berkeley au siècle des Lumières : immatérialisme et scepticisme au XVIII^e siècle*, Paris, Vrin, 2003; André Charrak, *Empirisme et théorie de la connaissance : réflexion et fondement des sciences au XVIII^e siècle*, Paris, Vrin, 2009.
- (3) アラスデア・マッキンタイア『美德なき時代』篠崎榮訳、みすず書房、1993年、99頁。
- (4) 同書、同頁。
- (5) 同書、同頁。
- (6) 同書、100頁。
- (7) 同書、104頁。
- (8) Steven Shahin & Simon Schaffer, *Leviathan and the air-pump: Hobbes, Boyle, and the experimental life*, Princeton, Princeton University Press, 1985. [スティーヴン・シェイピン、サイモン・シャッフアー『リヴァイアサンと空気ポンプ——ホッブズ、ボイル、実験的生活』、吉本秀之監訳、柴田和宏、坂本邦暢訳、名古屋大学出版会、2016年。]
- (9) *Ibid.*, p. 25. [同書、53頁。]
- (10) *Ibid.* [同書、同頁。]
- (11) *Ibid.*, p. 77. [同書、96頁。]
- (12) イアン・ハッキング『確率の出現』広田すみれ・森元良太訳、慶應義塾大学出版会、2013年。
- (13) Barbara J. Shapiro, *Probability and certainty in seventeenth-century England: a study of the relationships between natural science, religion, history, law, and literature*, Princeton, Princeton University Press, 1983. その後も蓋然性に関する歴史的研究は数多く世に出ている。James Franklin, *The Science of Conjecture: Evidence and Probability Before Pascal*, Baltimore, Johns Hopkins University Press, 2015. [ジェームズ・フランクリン『「蓋然性」の探究：古代の推論術から確率論の誕生まで』南條郁子訳、みすず書房、2018年。]
- (14) Barbara J. Shapiro, "Beyond Reasonable Doubt" and "Probable Cause": *Historical Perspectives on the Anglo-American Law of Evidence*, Berkeley, University of California Press, 1991. [バーバラ・J・シャピロ『「合理的の疑いを超える」証明とはなにか：英米証明理論の史的展開』庭山英雄・融祐子訳、日本評論社、2003年。]
- (15) Barbara J. Shapiro, *A culture of fact: England, 1550-1720*, New York, Cornell University Press,

2000.

- (16) Anne-Robert-Jacques Turgot, « Plan du second Discours les progrès de l'esprit humain [vers 1751] », dans *Œuvres Turgot et document le concernant*, avec biographie et notes par Gustave Schelle, t. I, Paris, Félix Alcan, 1913, pp. 310-311.
- (17) ブーシェ・ダルジが執筆したこれらの項目は法律学に関するものである。
- (18) 他の執筆者の項目内容に編集者ディドロが不満を抱いた場合、自らの筆を示す記号であるアステリスク (*) を付して項目ないし項目群に介入することがしばしばある。
- (19) 当時、様々な辞書・事典が存在したが、有名なのはアントワヌ・フルチエールの『普遍的辞典』(第1版1690年)だろう。当辞典項目「事実」は人間の行為、過去に起きたこと、語りといった字義的な意味の記述であった。そして、この項目内容はイエズス会士たちによって作られた『トレヴー辞典』(第2版1704年、第3版1721年)にそのまま借用された。だが、『トレヴー辞典』では法的意味おける事実を説明するくだりで、オリジナルの『普遍的辞典』にはないジャンセニスムに関する記述を追加している。ここに、言葉の用法を通じてイエズス会側によるジャンセニストへの批判を読み取ることが可能かもしれない。また、『トレヴー辞典』は『百科全書』の登場を受けて、百科全書派を批判したり(あるいは『百科全書』を借用する形で)するべく、自らの辞書を大幅に改訂している。ゆえに、ディドロの項目「事実」に対して『トレヴー辞典』がどうリアクションしているかを読み取ることができるかもしれないが本稿ではそこまで分析できなかった。
- (20) Diderot, art. « FAIT », *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres*, Paris, Briasson, David, Le Breton, Durand, t. VI, 1756, p. 383b. 以下 *Enc.* と略記。
- (21) Marie Leca-Tsionis, *Ecrire l'Encyclopédie: Diderot, de l'usage des dictionnaires à la grammaire philosophique*, Oxford, Voltaire Foundation, 1999, p. 345.
- (22) Diderot, *op. cit.*, p. 383b.
- (23) *Ibid.*
- (24) ピエール・ベールにおける「批判」の問題は野沢協の解説を参照せよ(野沢協「解説」、『ピエール・ベール著作集』、第3巻、法政大学出版局、1982年、1166頁)。ところで、イヴ＝シャルル・ザルカはベールの「批判」概念をデカルト由来のものと解釈し、ベールが批判と理性を同一視することで「批判」活動は「文芸共和国」という公共空間の成立に寄与したと主張している。一方で、野沢はベールにおけるデカルト主義を表面上だけのものと主張している。Yves Charles Zarka, « L'idée de critique chez Pierre Bayle », *Revue de Métaphysique et de Morale*, No 4/1999; 野沢、前掲書、1292-1299頁。
- (25) Diderot, *op. cit.*, p. 383b.
- (26) Diderot, art. « AGNUS SCYTHICUS », *Enc.*, t. I, 1751, p. 180a. [ディドロ「アグヌス・スキティクス(スキティア仔羊草)」野沢協訳、『ディドロ著作集 哲学Ⅱ』第二巻、法政大学出版局、1980年、5頁。] なお当項目における参照指示は「確実性」および「蓋然性」であり、「事実」への参照指示はない。
- (27) Diderot, art. « FAIT », *Enc.*, t. VI, 383b.
- (28) *Ibid.*
- (29) D'Alembert, *Discours préliminaire de l'Encyclopédie*, in *Enc.*, t. I, 1751, p. xiv. [「百科全書序論」、『百科全書——序論および代表項目』、桑原武夫訳編、岩波文庫、1971年、63頁。]
- (30) 本稿における項目「確実性」に関する記述はアクレー＆ジョフロワ＝ゴウヤの研究に多くを負っている。彼らの主張では、項目「確実性」に対する冒頭のディドロの介入は、単なる導入ではなく一個の百科全書的项目の体をなすものであるという。また、ブラド師がソルボンヌに提出した学位論文を巡るスキャンダルと『百科全書』出版販売差し止めの関係についてはアクレーの研究を参照せよ。当項目におけるディドロの介入文と『トレヴー辞典』『チェンバース』との比較に関してはレカ＝ツイ

オミスの前掲書を参照せよ。Cf. Jean Haechler et Françoise Jouffroy-Gauja, « L'article CERTITUDE de l'*Encyclopédie* commenté par un souscripteur anonyme », *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, no 29, 2000, pp. 129-148; Jean Haechler, *L'encyclopédie : les combats et les hommes*, Paris, Les Belles Lettres, 1998; Leca-Tsiomis, *op. cit.*, pp. 198-201.

- (31) Abbé de Prades, *art.* « CERTITUDE », *Enc.*, t. II, 1752, p. 847a.
- (32) *Ibid.*, p. 847a-b. 同様のことは『ブラド師の弁護』においても語られる。Cf. *Apologie de M. l'abbé de Prades*, Amsterdam, 1752, p. 11 et suiv. 「ブラド師の弁護」正編（一）、逸見龍生訳・注解、『フランス文化研究』、第4号、2011年、4頁以下および訳注参照。
- (33) 議論の発端を特定することは難しいが、この種の議論はテキスト的に『百科全書』第一巻刊行以前のディドロの匿名出版である『哲学断想』（1764年）の断想46にまで遡ることができる。
- (34) Diderot, *art.* « FAIT », *Enc.*, t. VI, p. 383b.
- (35) Dumarsais, *art.* « EXPÉRIENCE », *Enc.*, t. VI, 1756, p. 297a-b.
- (36) Diderot, *op. cit.*, p. 383b.
- (37) ベールらの考証学を18世紀フランスがいかに吸収、展開したかという問題についてはシャンタル・グレルの研究が詳しいが、そこではディドロの議論は論じられておらず、主にニコラ・フレレ（Nicolas Fréret, 1688-1749）の歴史学を軸にフランス国制史の形成が中心的に議論されている。Cf. Chantal Grell, *L'Histoire entre érudition et philosophie: étude sur la connaissance historique à l'âge des Lumières*, Paris, PUF, 1993.
- (38) Diderot, *art.* « AGNUS SCYTHICUS », *Enc.*, t. I, pp. 180a-b. [邦訳、6頁。]
- (39) Diderot, *art.* « FAIT », *Enc.*, t. VI, pp. 383b-384a.
- (40) *Ibid.*, p. 384a.
- (41) *Ibid.*
- (42) *Ibid.*
- (43) *Ibid.*
- (44) *Ibid.*
- (45) ここでは展開できないが、重要な点としてディドロのスピノザへの反応がある。というのも、事実の確実性を論じた哲学者として当時重要であったのがスピノザであったからだ。1670年に匿名で出版した『神学・政治論』第一章、第二章のなかで、スピノザは「預言」および「預言者」の問題を取り扱い、預言の心的確実性（certitudo moralis）とその根拠を聖書解釈によって議論している。そこでは権威や証言には寄らずに成立しうる確実性が吟味され、ディドロの項目「事実」の語彙群と非常に近い。以上の点から、ディドロの項目「事実」の背後にはスピノザの存在が予想される。また、『神学・政治論』におけるスピノザの預言・預言者論はホッブズの『リヴァイアサン』（1651年）第三部における聖書解釈と多分に関係することが近年の研究で明らかとなった（福岡安都子『国家・教会・自由——スピノザとホッブズの旧約テキスト解釈を巡る対抗』東京大学出版会、2007年）。神の啓示と人民の間の媒介者（＝預言者）の問題を巡ってホッブズとスピノザは対立していた。内乱の阻止するために、ホッブズは世俗の王にのみ預言者としての性質を付与することで、人民から神を切り離し、排他的主権の成立を理論化した。しかし、スピノザは預言を預言たらしめるものとして「心的確実性」を持ち出すことで、万人に神へのアクセスを保証する論理を打ち立てる。こうして、スピノザは預言者（王）の特権を人民の手に取り戻そうとした（言論の自由）。以上の政治的文脈が預言者解釈を巡ってなされたというのが、近年の研究の見方である。本稿はこれらの政治的文脈をまったく欠き、認識論の議論からのみディドロの項目を読むとした。ゆえに、念頭に置くべきはディドロの政治的意図と項目「事実」の問題かもしれない。
- (46) Hisayasu Nakagawa, « Diderot, Rousseau et autres « incrédules » au service du catholicisme : à propos du *Déisme réfuté par lui-même* de l'abbé Bergier », *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, 39, 2005, p. 157-176.

History of Facts:
Diderot's Article "FACT" in the *Encyclopédie*

Masashi FUCHIDA

Abstract

This paper aims to clarify what kind of connotations existed in the common term "fact" in 18th century France, where empiricism strongly influenced on french philosophers. In particular, I focused on the article "Fact" in the *Encyclopédie* written by Denis Diderot, and by clarifying what was at stake in this article, I was able to understand the expansion of the discourse space surrounding facts. Analyzing Diderot's article "Fact", we could see that Diderot himself sensed a crisis that the erudite methodology in the 17th century would be invalidated. This crisis appears to be a post-truth phenomenon in our era, and this means that the facts do not consist of scientific (public) procedures alone, but are based upon individual belief system.

Keywords : fact, belief, erudition, post-truth, enlightenment